

「ホームレス」と 「ライフレス」

ホームレスと呼ばれる人たちのすみか、ブルーシートで覆われた小屋は、立派な「家」である。その暮らしぶりには、生きる知恵とよろこびがあらわれている。そう言えるように、坂口恭平さんは写真集『0円ハウス』(※1)を世に出した。と言っても、ほとんどの人は、橋の上からブルーシートを「瞬見下ろす」だけで通り過ぎるだろう。けれど、一度ぐらい聞いてみればいい。橋の下から見上げられたわたしたちは、どのように見えているのか。坂口さんは教えてくれる。



里見喜久夫(「コトノネ」編集部)＝インタビュー
interviewer.text by Kikuo Satomi
河野 豊＝写真
photograph by Yutaka Kohno

無認可障害者のシアワセ

—二週間ほど前に鬱状態に入られたと聞いたんですが、もう大丈夫ですか。はい、ここに来れましたから。(ホテル・ラウンジ)

—躁鬱病だけれど、障害者手帳(※2)は持っていないんですね。一年ぐらい前ですね。熊本市に申請したんですが、審査ではねられた。

—無認可の障害者？

—そう、もぐりの障害者です。理由は聞いていないですけど、心療内科の主治医が言うには、ちゃんと稼いでいるからじゃないですかって(笑)。

—『坂口恭平 躁鬱日記』(※3)にも、年収一〇〇万円以上とありました。

—そのころ、半年くらい寝て暮らしていた、いつさく裂するかわからない爆弾を抱えている状態だったけれど…。でも、まあ、稼げなくなったら、申請しようっていう感じですかね。

—躁鬱病との付き合いは、いつごろからですか。病院で診断を受けたのは、二〇〇九年だから、五年ぐらい前ですね。

—それまで、自覚は？

—表に出はじめたのはたぶん大学生のとき。大学進学で東京してからですね。それまでは、準備運動期間中というか…(笑)。高校のときも、やっぱり、おかしかったですよ。

—他人から、おかしいよ、と言われたことは。人に言われたことはあんまりないか

—もしれない。でも、あり得ないことをずっとしたがる時と、やった後やらと打ちひしがれるというか、そういうこともあった。でも、病院に行こうとまで思っていなかったなあ。

—思春期って、みんなかなり怪しいから。人には言えない妄想も多くて。だから、ボクもそういうことなのか

—なっている感じでしたね。

—そのレベルを超えたのが、二〇〇九年ごろですか。

—だんだん、重たくなって…。もう体がちよと動かなくなつて。これはおかしいだろうと思つて、で、そのままずっといかに思つたら、ある時点で治つて、いきなり活発になるんですよ。そのときはもう結婚してまして。妻はそういうもんだと思つていましたよ。ボクの中では、認めてなかったという

(※1)『0円ハウス』

二〇〇四年七月、リトルモア刊。東京・大阪・名古屋の三都市で出会った路上生活者たちの家々をまとめた写真集。彼らがつくる家には、意識と無意識が色濃く反映され、あふれるほどの個性と機能性が混在している。「家」という箱、本来の意味を問いかける。

(※2)障害者手帳

障害者福祉関係のサービスの利用資格を示す証票となるもので、身体障害者手帳、療育手帳(知的障害が対象)、精神障害者保健福祉手帳がある。施設利用、医療給付、補装具などの福祉サービス利用、運賃割引、税の減免など、手帳の所有を要件としている。

(※3)『坂口恭平 躁鬱日記』

二〇一三年二月、医学書院刊。僕は治ることを諦めて、「坂口恭平」を操縦することにした。家族とともに。建てない建築家、牙えない天才、治さない患者である坂口恭平が生きたために綴った、涙と笑いと感動の当事者研究。

